

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

はじめに

私は、お寺を調べていた

大石 浩之

「お寺は、なぜオワコンになったのか。」この言葉は、お寺を笑うためのものではない。むしろ、地域の中で静かに役割を失いつつある場所を前に、私自身へ突きつけた問いである。

檀家は減り、法事は簡略化され、葬儀は専門事業者が担うようになった。寺へ行かなくても、生活は成り立つ。お経を聞くだけなら録音でもよい。知識を得るだけなら本やインターネットがあり、いまはAIもある。それでも私は、地域から寺がなくなることを、単なる施設の整理とは思えなかった。

かつて寺は、祈りだけでなく、学び、相談、祭り、供養、記録、災害時の助け合いを受け止めていた。しかし社会が発達するにつれ、それらの役割は学校、行政、病院、公民館、葬儀会社へ分かれていった。これは社会の進歩であり、昔へ戻ればよいという話ではない。

問題は、役割を外へ移したあと、私たちが何を失ったかである。便利さのなかで、人に会う理由を失ってはいないか。死を専門家へ委ねることで、自分の生を考える時間まで手放してはいないか。知識を誰もが得られるようになった一方で、経験を分かち合い、迷いを引き受ける知恵の場を失ってはいないか。

私はATAWI TEMPLEで地域寺院の論文を書いてきた。AIに資料整理を手伝わせ、史料の矛盾や空白を問いに変え、実際に現地を歩いた。AIは大量の文章を比較できる。しかし、境内の風、閉じた扉の重さ、祭りの準備をする人の表情までは経験できない。だから私は歩く。

本書では、磐田市の十二寺院を取り上げる。寺を優劣で評価するためではない。それぞれの場所に残る教育、管理、再建、巡礼、景観、祭り、文化財、防災、供養の痕跡から、私たち自身の変化を考えるためである。

史料で確認できることと、伝承として語られること、私が現地で感じたことは区別して書く。分からないことを、もっともらしい物語で埋めない。それはAIを使う著者として、最初を守るべき約束だと思っている。

この本は、お寺を礼賛する本でも、お寺へ改革案を突きつける本でもない。お寺という鏡を通して、私たちは何を便利にし、何を失い、何を残したいのかを考える本である。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第1章

知識は寺を出ていった

大石 浩之

第1章

知識は寺を出ていった

金剛寺から考える、知識と知恵の違い



金剛寺境内。寺子屋、報徳、講、坐禅会という異なる活動の記憶を、一つの場所が受け止めてきた。

寺子屋が寺にあったのは、お寺が最初から教育事業を目指していたからではない。近世の地域社会で読み書きができ、漢文や仏典を扱えた知識層の一角に僧侶がいたからである。人は、知識のある場所へ学びに行った。

金剛寺の歴史をたどると、寺子屋だけでなく、学校や幼稚園の仮施設、報徳研究、大峰講、坐禅会など、時代の異なる活動が重なって見える。寺は一つの役割に固定された施設ではなく、その時代の地域が必要とした機能を受け入れる器だった。

やがて学校制度が整い、教師という専門職が生まれ、知識は寺の外へ広がった。これは寺が敗北した歴史ではない。知識が民主化した歴史である。誰もが学べる社会になった結果、寺に学びを求める必然性が薄れた。

だが、ここで問いが残る。知識を得る場所は増えたが、知恵を育てる場所も増えただろうか。知識は答えを速くする。知恵は、答えの出ない問題と一緒にいる力である。進学、仕事、介護、看取り、死別。人生の重要な場面には、検索結果だけでは決められないことが多い。

AIは知識の民主化をさらに進めた。古文書の語句を探し、年代を比較し、仮説を並べる速度は、人間一人の作業をはるかに超える。一方で、AIは責任を引き受けて生きることがない。誰かを看取り、後悔し、時間をかけて意味を見いだすこともない。

寺にしか知識がなかった時代は終わった。それを惜しむ必要はない。むしろ問うべきは、知識を独占しなくなった寺と、知識へ自由にアクセスできる私たちが、知恵を分かち合う場所を作れているかどうかである。

金剛寺に残る多層的な活動は、寺が何度も役割を変えてきたことを教える。それは「昔はよかった」という証拠ではない。地域の変化に応じて、場所の意味は更新され得るという証拠である。

私たちは学べるようになった。その代わり、誰と一緒に考えるのかを失ってはいないだろうか。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>
写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第2章

小さな祈りは、価値がないのか

大石 浩之

第2章

小さな祈りは、価値がないのか

合掌寺の小祠・石碑・石仏から考える



合掌寺の現在。大きさや知名度では測れない、小さな宗教空間の存在を考える。

有名な仏像も、巨大な山門も、長い観光客の列もない寺を、私たちは見過ごしやすい。検索結果に情報が少ない場所は、価値まで少ないように見える。しかし、それは情報量と価値を混同した見方である。

合掌寺の境内には、小祠、石碑、石仏、手水鉢などが置かれている。それぞれの造立年代や由来は、銘文や寺蔵資料を確認しなければ断定できない。分からないものを、古い、尊い、珍しいという言葉で飾るべきではない。

それでも、そこに物が置かれ、手入れされ、手を合わせる余地が残されている事実には意味がある。宗教空間は、必ずしも大勢を集めることで成立するのではない。一人が立ち止まれること、誰かの記憶を置いておけることも、場所の機能である。

現代社会は、価値を利用者数、売上、閲覧数、効率で表現することに慣れた。数字は必要だが、数字に現れにくい価値が消えるわけではない。誰も来ない時間が長いからこそ、静けさが守られる場所もある。

一方で、「静かだから価値がある」と美化するだけでは足りない。維持には清掃、修繕、土地管理、費用、意思決定が必要である。誰かの無償労働によって静けさが支えられているなら、その負担を見ない態度は、寺を大切にしているとは言えない。

合掌寺から学べるのは、規模の小ささを衰退の証拠と決めつけないこと、同時に小ささを無条件に美化しないことである。価値と負担を、同じ場所の問題として見る必要がある。

私たちは、分かりやすく役に立つものへ注意を向けるようになった。では、すぐに役立たない静かな場所を支える理由を、まだ持っているだろうか。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第3章

細々と残ることは、敗北なのか

大石 浩之

第3章

細々と残ることは、敗北なのか

金台寺の無住・兼帯から考える維持の知恵



金台寺の参道。小規模な寺院が、管理主体を変えながら寺号と礼拝空間を保ってきた。

金台寺は、会話のなかで何度も表記を間違えられた寺である。「近台寺」ではない。所在地も中泉や豊田ではなく、ATAWI TEMPLEの地区分類では南部である。固有名詞を一字間違えるだけで、その場所の歴史は別物になる。

『静岡県磐田郡誌』は金臺寺について、天龍村天龍字蛭子森、見付町省光寺末、本尊阿弥陀如来と記す。寺院一覧には、山号嶺松山、1472年9月創立、開山連阿、境内474坪、檀徒18戸という記載がある一方、住職欄は

空欄である。

ここで注意が要る。郡誌の記載は、1472年の同時代文書そのものではない。住職欄が空白だからといって、その年に無住だったと即断もできない。確認できるのは、近代に編纂された資料がそのような由緒と管理状態を記録したということだ。

現在の案内にも、省光寺による管理や無住という説明が見られる。独立した住職が常駐しなくても、寺号、寺地、堂宇、礼拝の場所が残ってきた。これは不完全な寺なのだろうか。それとも、限られた人と費用で存続するための制度的な知恵なのだろうか。

私たちは、常に人がいて、行事が多く、発信が活発な寺を「元気な寺」と呼びやすい。しかし、その基準だけでは、小さな地域が長い時間をかけて守ってきた存在を切り捨てることになる。

もちろん、無住や兼帯を美談にははいけない。管理する寺院や地域の負担、修繕費、意思決定、墓地管理の実態を確認する必要がある。ただ、常駐しないことと価値がないことは同じではない。

金台寺が示すのは、存続には多様な形があるということだ。大きく発展することだけが未来ではない。小さく、他者に支えられながら残ることも、地域の選択になり得る。

私たちは、成長しないものを失敗と呼ぶようになった。だが、減少する社会で本当に必要なのは、成長ではなく、無理なく残す技術なのかもしれない。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第4章

変わり続けたから、残った

大石 浩之

第4章

変わり続けたから、残った

永福寺の開創伝承・風災・再建



永福寺の現在。本堂は不変の遺物ではなく、災害と再建を経た継続の姿である。

伝統という言葉から、私たちは変わらない形を想像する。しかし、現存する寺院の歴史をたどると、建物は壊れ、建て替えられ、関係する寺院や地域の支え方も変化している。

永福寺については、1504年の開創伝承、福王寺との本末関係、1859年の風災、その後の本堂再建、1882年の再建、1997年の現在の本堂建立という時間が論文で整理されている。年代ごとに根拠の種類は異なり、すべてを同じ確度で語ることはできない。

それでも確かなのは、現在の姿が創建時の姿をそのまま保存したものであることだ。人は壊れた建物を直し、必要なら建て替え、その時代に可能な材料と技術で場所をつないできた。

変化を伝統の敵とみなすと、過去の人々が行った再建まで否定することになる。むしろ伝統とは、同じ物を凍結することではなく、何を残し、何を変えるかを世代ごとに判断する営みのだろう。

現代の寺院にも、耐震、バリアフリー、空調、情報発信、墓地管理など、過去にはなかった課題がある。新しい設備を入れれば俗化した、昔の形を守れば時代遅れだと単純に評価することはできない。

私たちの側も変わった。長い石段を上れない人が増え、遠方に暮らす家族が増え、法要へ集まれる時間も減った。寺の変化は、社会と家族の変化への応答でもある。

永福寺の再建史は、変わらないから尊いのではなく、変わりながら続けたから現在があることを教える。残すことは、過去への忠誠ではない。未来の人がもう一度選び直せる状態を渡すことだ。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>
写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第5章

地域の記憶は、どこへ移ったのか

大石 浩之

第5章

地域の記憶は、どこへ移ったのか

松久院の学校・巡礼・大念仏



松久院本堂。学校、巡礼、念仏という異なる地域活動の記憶が境内に重なる。

松久院には、1624年の開創伝承、1875年の三家学校、永照塔、袖ヶ浦33観音、遠州大念仏に関する複数の研究がある。これらは一つの起源から一直線に続く物語ではない。それぞれ異なる時代の地域活動が、同じ寺院空間へ重なったものだ。

寺が学校として使われた時代、地域で利用できる建物と知識を持つ人が寺にいた。学校制度が整えば、その役割は専用校舎へ移る。巡礼は交通や生活時間の変化を受け、大念仏も担い手や開催方法を変えていく。

役割が別の制度へ移ること自体は悪くない。問題は、移ったあとに元の場所との関係が切れ、なぜその活動が必要だったのかまで忘れられることである。

石碑や札所表示は、活動そのものではない。そこに石が残っていても、巡礼の身体感覚や念仏を支えた共同作業が自動的に伝わるわけではない。記念物を保存するだけでなく、誰が、いつ、何のために集まったかを言葉にする必要がある。

私たちはデータを保存する技術を手に入れた。しかし、記録が増えるほど、読む理由を失うこともある。写真、名簿、年表が保存されても、現在の生活との接点がなければ、記憶は倉庫の中で眠る。

AIは散らばった記録の関係を探すのに役立つ。だが、どの記憶を大切にするかは、AIが決めることではない。地域の人が現在の課題と結び付けて初めて、記録は生きた意味を持つ。

松久院の多層的な記憶は、失われた活動を懐かしむためだけにあるのではない。地域がどんな場を必要としてきたかを知り、これから何を必要とするかを考える材料になる。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>
写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第6章

寺は、建物だけではない

大石 浩之

第6章

寺は、建物だけではない

安全寺と岩井の湿地文化景観



安全寺への参道。寺院を水、農業、地形、伝承を含む地域景観の一部として捉える。

安全寺を考えると、堂宇だけを切り取ると大切なものを見落とす。周辺には鶴ヶ池や桶ヶ谷沼があり、水、農業、生物多様性、伝承が一つの地域景観を形づくっている。

『安全寺記録』をもとに語られる源頼朝伝承は、史実としての確定と、地域で語り継がれた記憶を区別して扱う必要がある。頼朝が来たかどうかだけを争えば、なぜその物語が土地に必要とされたのかという問いが消えてしまう。

伝承は、事実の代用品ではない。土地の特徴や共同体の価値観を、後世へ渡す媒体になることがある。一方で、伝承を史実と断定すれば、地域史への信頼を損なう。大切なのは、伝承を伝承として尊重し、その成立と継承を調べることである。

水辺の景観も同じだ。池や湿地を美しい自然として眺めるだけでは、農業、水管理、災害、生態系との関係が見えない。寺は、その複雑な関係のなかに置かれている。

現代の私たちは、施設を敷地境界の内側だけで評価しがちである。建物の利用者数、修繕費、収益性を見れば、寺の価値を計算できるように思える。しかし、景観、地名、祭り、記憶のつながりは、敷地を越えている。

寺がなくなったとき失われるのは、本堂だけではないかもしれない。土地の物語をまとめて思い出すための中心点が失われる可能性がある。逆に、建物が変わっても、その関係を記録し語る人がいれば、地域の記憶は残り得る。

安全寺は、寺院価値を建築物だけで測る視線を問い直す。私たちは土地を所有単位で見るようになった。その結果、土地同士の関係を読む力を失ってはいないだろうか。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第7章

寺が消えても、つながりは残る

大石 浩之

第7章

寺が消えても、つながりは残る

増参寺・旧東光寺と大めし祭り



増参寺の現在。旧東光寺が廃寺となった後も、祭りと読経が共同体の記憶をつないできた。

廃寺という言葉には、失敗や終わりの響きがある。しかし、寺がなくなったあとも、そこで行われていた祭り、読経、直会、人の関係が別の場所へ受け継がれることがある。

増参寺と旧東光寺に関わる大めし祭りは、そのことを考える格好の事例である。旧東光寺という寺院の形が失われても、共同体の行為がすべて消えたわけではない。読経や祭りは、場所や担い手を変えながら続いてきた。

ここから、「寺を残す」とは何かという問いが生まれる。建物、法人、寺号、住職、祭り、記憶。そのどれを残せば、寺が残ったと言えるのだろうか。

公民館やコミュニティ施設が、人の集まる役割を引き継ぐ場合もある。それを寺の敗北と見る必要はない。寺が担っていた公共性が、別の制度へ受け渡されたとも考えられる。

ただし、機能が移れば同じ価値が自動的に残るわけではない。公民館は集会を開けても、死者への祈りや長い時間の記憶を同じように扱うとは限らない。祭りがイベント化すれば、参加者は増えても、供養や共同作業の意味が薄れることもある。

私たちは、つながりを便利な連絡へ置き換えた。SNSで予定を共有し、必要なときだけ集まれる。しかし、共同体は情報交換だけで成り立つのではない。面倒な準備、役割分担、食事、失敗、世代間の摩擦まで含めて、人は互いを知っていく。

大めし祭りが問いかけるのは、寺を元の姿に戻す方法ではない。形が変わったあとも、何を手放さずに受け継ぐかである。

寺はなくなっても、つながりはなくなるらない。だが、つながりは放っておいても残るものではない。誰かが準備し、参加し、意味を語り直すことで初めて続いていく。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>
写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第8章

檀家でなくても、寺を支えている

大石 浩之

第8章

檀家でなくても、寺を支えている

行興寺と熊野の長フジ



行興寺境内の藤棚。信徒とは限らない来訪者が、寺と接点を持つ季節の風景である。

行興寺を訪れる人のすべてが、檀家や時宗の信徒とは限らない。熊野の長フジを見に来る人は、花、季節、写真、地域文化を目的に境内へ入る。それでも、その来訪は寺と社会の接点を生んでいる。

寺の価値を檀家数だけで測ると、このような関係は見えない。文化財を見る人、散歩で立ち寄る人、歴史を調べる人、祭りを手伝う人も、寺の周

辺にいる。

長フジは「生きた文化財」である。建物や石造物と違い、毎年成長し、気候や病害、剪定、土壌、藤棚の管理に影響される。保存とは、動かない物を囲っておくことではない。変化する生命を継続的に世話することだ。

観光客が増えれば価値が高まる、と単純には言えない。混雑、根の踏圧、駐車、騒音、費用、担い手の負担が生じる。人を呼ぶことと、文化財を守ることは、ときに緊張関係にある。

それでも、檀家以外の人々が寺を訪れることには可能性がある。宗教的所属を求めなくても、季節の経験を通じて場所への関心が生まれる。関心は寄付、ボランティア、記録、次世代への紹介へつながるかもしれない。

私たちは、所属しなければ責任を持たなくてよい社会に慣れた。地域外に暮らし、必要なサービスだけを購入することもできる。しかし、文化や景観は購入者だけでは維持できない。

行興寺の藤は、寺の利用者とは誰かを問い直す。檀家ではなくても、私たちは場所から恩恵を受けている。その恩恵に気づいたとき、支える側へ回る選択が生まれる。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>
写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第9章

祈りの場所は、防災の場所になれるか

大石 浩之

第9章

祈りの場所は、防災の場所になれるか

竜雲寺と豊浜沿岸地域



豊浜の竜雲寺。沿岸地域における寺院と自治、防災、地域記憶の関係を考える。

沿岸地域で暮らす人にとって、災害は抽象的な問題ではない。地震、津波、風水害が起きたとき、どこへ逃げ、誰と連絡を取り、何を持ち出すかは、日常の地域関係と結び付いている。

竜雲寺の境内には、地域防災と自治組織との関係を考える手掛かりがある。防災備蓄倉庫の存在は、寺院空間が宗教行事以外の地域機能と接続し

得ることを示す。

ただし、備蓄倉庫があることと、公的な指定避難所であることは同じではない。災害時の利用を案内する場合は、最新の行政情報を優先しなければならない。寺を防災拠点として美化するだけでは、安全を損なう。

寺が災害時に役立つ可能性は、建物だけにあるのではない。場所を皆知っていること、地域組織と関係があること、境内に空間があること、死者供養や記録保存の経験があることも重要である。

一方で、寺自身も被災する。堂宇、墓地、過去帳、仏像、地域資料をどう守るか。人命を最優先しながら、何をどの順に救うかを平時に決めておく必要がある。

私たちは防災を行政へ委ねがちである。専門的な計画は不可欠だが、災害直後に最初に助け合うのは近隣の人である。日頃顔を合わせない地域では、備蓄があっても協力の手順が動かない。

竜雲寺の事例は、寺が避難所になれるかという設備論だけではない。私たちが平時から関係をつくれているかという問いである。祈りの場所と防災の場所は、共に人の弱さを前提としている。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第10章

四十二人の集落で、寺を残す意味

大石 浩之

第10章

四十二人の集落で、寺を残す意味

十郎島輪中と寶珠院



寶珠院入口と十郎島の集落景観。寺院継承を、人、土地、水、記憶の関係として考える。

十郎島は天竜川河口の掛塚輪中に位置する。資料には1591年の「拾良嶋」53石余という村高が見え、『静岡県磐田郡誌』は寶珠院について1596年の開山、1600年の分派を伝える。

これらは同じ種類の数字ではない。村高、寺伝、現在人口を一本の増減グラフへ並べることはできない。2025年8月末の行政統計では十郎島は19

世帯42人だが、これは檀家数や実際の寺院維持能力を直接示さない。

小規模集落の寺を語るとき、「消滅寸前」という言葉は強い。しかし、その言葉は住民の生活を外から消費する危険を持つ。人数が少ないことと、価値が少ないことは同じではない。

輪中では、水害への対応、堤防、排水、農業、舟運が地域の協力を必要としてきた。寶珠院が歴史上どの防災役割を担ったかは、現時点で具体的記録が確認されていない。可能性を実績として書かない姿勢が必要である。

それでも寺院継承を考えるには、人口だけでなく、地区外の檀家、墓地利用者、兼務寺院、本山、自治会、施工業者など、広域の支えを見なければならぬ。居住人口と支える人数は一致しない。

建物を残すか壊すかだけでもない。過去帳、墓碑、棟札、地名、水害の記憶、土地利用の履歴を、誰がどこで保存するのか。寺院は、人と土地の関係を束ねる記録装置でもある。

私たちは、人数が減ればサービスを統合する。合理的な判断だ。しかし、統合すると失われる場所固有の記憶を、どのように別の形へ移すかまで設計しているだろうか。

寶珠院は、小さな寺を無条件に残せと迫るのではない。残さない場合を含め、何を記録し、誰へ引き継ぐかを考える責任を私たちへ返している。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第11章

失われた場所の記憶を、誰が預かるのか

大石 浩之

第11章

失われた場所の記憶を、誰が預かるのか

見性寺の移動文化財



見性寺本堂。廃寺や再編を経た文化財を受け入れ、地域の記憶を預かる場所として考える。

見性寺は、不動3尊立像、刺繍16羅漢図、五鈷鈴という性格の異なる三件の磐田市指定文化財を所蔵する。これらを「古刹の名宝」と一括すると、それぞれが移動してきた歴史が見えなくなる。

不動3尊立像は、行政資料で平安時代作、河原町にあった明王寺の旧本尊とされる。廃寺後に見性寺へ移ったとすれば、寺院は自分の歴史だけで

なく、失われた寺の記憶を引き受けたことになる。

刺繍16羅漢図は材料や制作年代、文献初出を分けて検討する必要がある。五鈷鈴には隠元の遺品という寺伝があるが、公開資料だけでは直接関係を確定できない。伝来の魅力と証拠の確度を混同してはいけない。

文化財は、最初から現在の所有者のために作られたとは限らない。廃寺、寄進、移座、修理、宗派変更を経て、別の場所で守られる。移動は価値の喪失ではなく、救済や継承の方法になることがある。

私たちは、物は元の場所にあるほど本物だと考えやすい。しかし元の場所が失われたとき、移すことを否定すれば、物そのものも失う。重要なのは、移動の履歴を消さず、なぜここにあるかを記録することだ。

寺院は文化財の倉庫ではない。現役の宗教空間であり、保存、礼拝、防犯、公開が競合することもある。すべてを公開することが公共性ではない。守るために見せない判断も必要である。

見性寺から見えるのは、寺が地域の「記憶の避難所」になり得ることだ。元の場所を失った物と物語を預かり、次の世代へ渡す。これは利用者数だけでは測れない提供価値である。

私たちはデータをクラウドへ預けるようになった。では、土地に結び付いた記憶を、誰に預けるのだろうか。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

第12章

私たちは、死を誰に委ねたのか

大石 浩之

第12章

私たちは、死を誰に委ねたのか

連城寺の年中行事・大草家供養・永代供養



連城寺の山門から本堂を望む。年中行事、人物供養、現代の永代供養が異なる時間を結ぶ。

現代の死は、病院、葬儀会社、火葬場、墓地管理者という専門機関に支えられている。専門化によって負担は軽くなり、衛生や手続きも整った。一方で、死が日常生活から遠ざかった。

連城寺の公式案内には、2月15日の涅槃会、4月8日の降誕会、春秋彼岸会、8月14日の山門大施食会、両祖忌、10月頃の大草家先祖供養、12月8日の成道会などが掲げられている。

これらは同じ供養ではない。釈迦の生涯、宗派の祖師、家の祖先、地域史上の人物、諸精霊という異なる対象を、寺院の一年が受け止めている。日程や実施方法は変わり得るため、確認年を付けて扱う必要がある。

大草家の供養は、近世の再興者と地域の記憶を結ぶ。人物を英雄化するだけでなく、誰がその記憶を守り、法要を続け、墓所を管理してきたかを見ることで、地域史が現在へ届く仕組みが分かる。

永代供養塔は、承継者不在、遠隔居住、家族形態の変化に対応する現代の仕組みである。「永代」という言葉を永久保証と誤解せず、供養主体、安置期間、合祀、管理責任を契約で確認しなければならない。

永代供養を伝統の断絶と見ることもできる。しかし、家単位で墓を守れない人の死を、別の制度で寺が引き受ける試みとも言える。変わったのは供養の必要性ではなく、供養を支える家族と地域の形である。

もしお経の音だけが必要なら、録音でよい。人が寺へ求めてきたのは、音声だけではなく、死者を記憶する時間と場所、残された人が自分の悲しみを社会の中へ置くための儀礼だったのではないか。

私たちは死を専門家へ委ねた。その結果、死者への対応は効率化した。では、自分が死ぬこと、生きている人と別れることを考える時間まで、委ねてしまってよいのだろうか。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>

写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。

お寺は、なぜオワコンになったのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。

終章

価値を失ったのは、誰だったのか

大石 浩之

終章 価値を失ったのは、誰だったのか

十二の寺を歩くと、「お寺はオワコンか」という問いに、単純な答えを出せなくなる。確かに、従来の提供価値だけでは人が離れていく。葬儀と盆の読経だけなら、費用を負担してまで寺を残したいと思わない人が増えるのは自然である。

だが、寺が担っていたものを見れば、失われたのは宗教サービスだけではない。学びと知恵を分かち合う場。小さな祈りを置く場。成長しなくても残る仕組み。災害から再建する記憶。巡礼や祭りを通じた共同作業。土地と水を一緒に読む視線。文化財を預かる場所。死と向き合う時間。

それらの多くは、学校、行政、公民館、文化施設、葬儀会社へ移った。社会は便利になった。その進歩を否定する必要はない。だが、機能を分けたことで、人生を全体として受け止める場所がなくなったのではないか。

寺は変わる必要がある。しかし本書の結論を、寺への経営改善提案だけにしたくない。お寺が提供価値を見つけることと同時に、私たちも、何にお金と時間を払い、何を次世代へ残したいかを選ばなければならない。

地域のつながりを求めながら、準備や役割分担を避ける。静かな場所を大切に言いながら、維持費を誰かに任せる。文化財を見たいと言いながら、保存の制約を嫌う。供養を求めながら、死の話を日常から遠ざける。お寺の衰退は、私たちの矛盾を映している。

AIを使えば、史料を速く整理できる。表記の揺れを探し、年代を比較し、見落とした問いを示すこともできる。しかし、AIは地域で責任を負わない。寺の扉を開け、草を取り、祭りを準備し、死者の名を覚えることはできない。

だから私は歩く。AIの答えを現地へ持って行き、合わない部分を確認め、分からないことを分からないまま記録する。研究とは、正しそうな物語を作ることではなく、訂正できる形で問いを残すことだと思う。

お寺は、私たちに答えを教えてくれなかった。ただ、問いを残してくれた。私たちは、便利さと引き換えに何を失ったのか。何を残すためなら、時間とお金を負担できるのか。

価値を失ったのは、お寺ではなく、私たちだった。その言葉を結論として押しつけたいのではない。読者一人ひとりが、自分の地域、自分の家族、自分の死を考えるための問いとして、持ち帰ってほしい。

主要資料

ATAWI TEMPLE「地域寺院研究紀要」および各寺院詳細ページ（2026年7月25日確認）。

静岡県磐田郡教育会『静岡県磐田郡誌』。国立国会図書館デジタルコレクション。

静岡県「静岡県知事所轄宗教法人名簿」。

磐田市文化財関係資料、文化財保存活用地域計画、歴史文書館・文化財だより、人口・防災関係資料。

曹洞宗宗務庁、時宗宗務所、臨済宗方広寺派大本山方広寺および各寺院公式公開資料。

各論文の個別参考文献と最終閲覧日は、本文注およびATAWI TEMPLE公開論文を参照。

注記

本書は寺院・宗派の公式見解ではない。史料で確認できる事項、後世の伝承、著者の考察を区別した。行事、管理状態、人口、墓地・永代供養等の現況情報は変更されるため、利用時には各公式窓口で最新情報を確認されたい。

制作基準日：2026年7月25日 主要研究資料：<https://temple.atawi.link/research/>
写真：ATAWI TEMPLE掲載画像。書籍への最終掲載は元画像・撮影者・寺院許諾を入稿前に確認する。